

担い手

連携

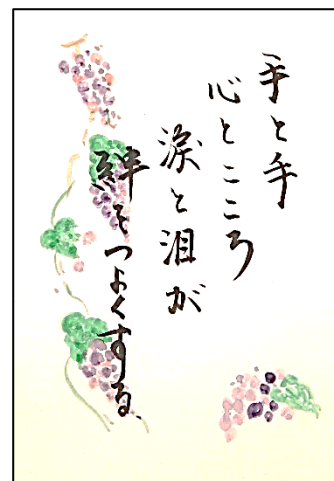
多世代交流

福祉

神奈川県内の地域情報を紹介する

地域のわ通信

発行 ▶ 区政推進課 地域力推進担当 411-7026



▶季節を感じる絵と温かい言葉の絵手紙(一部抜粋)

会わなくても深くつながる絵手紙での交流

スカイハイツトーカイ 「ふれあい会」

■遠くからの見守り活動と近くでの見守り活動

富家町(神西地区)はJR東神奈川駅の近くにあり、商業施設や病院、専門学校、共同住宅が多い地域。そのエリアにスカイハイツトーカイはある。25階建てのタワーマンションで、総戸数は230戸。「ふれあい会」は、高齢者の見守りと住民の交流を目的にマンション自治会とは独立した活動として自主運営している。

きっかけは、マンション内に民生委員がないことで、気になる方への対応が進まない現状と話し合い手がほしいという高齢者の要望を知

った住民が、何か手を打たなければということでの活動が動き出した。

始めに、ひとり暮らしの高齢者の見守りをする「ふれあい活動員」を選出し、気になる高齢者の見守り支援をスタートさせた。その後、区社協と反町地域ケアプラザの協力を得て、2014年10月に「ふれあい会」の活動へとつながった。

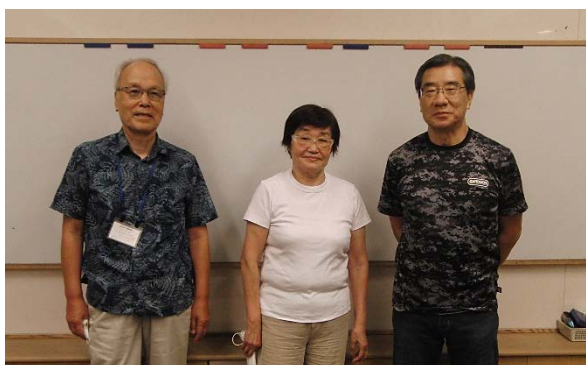
活動が進む中、見守り活動だけでなく、より住民に近い支援活動として、「ふれあいカフェ(*)」を、月に1回、マンション内の集会所を活用し開店させた。お茶や地域情報を提供し、住民を講師とした講習会を月替わりで企画している。さらに、住民の交流を促す同好会も発足させ、支援の幅を広げていった。

■コロナの中だからこそ、できる活動をやってみよう!

順調に進んでいた活動は、新型コロナウイルス感染拡大防止(*以下、コロナ)によって、活動は中止せざるをえなくなる。3月から、ふれあい

カフェをはじめすべての活動が中止になり、「ふれあい会」運営メンバーは、高齢の住民が外出もままならない中、どうしているのかと心配する日々が続いたという。そんな中、集合して話し合いができない時期でも「ふれあい会」運営メンバーで作るグループLINEで、チャットでやり取りをし、こんな時だからこそ、自分たちが今できることで、心配する高齢者の様子がわかる手段として考えたのが「絵手紙」を使った交流だった。

■ 住民の温かい心を運ぶ「絵手紙」



▶「ふれあい会」運営の中心メンバー
写真左：絵手紙の講師でもある平石さん
写真中央：会長の古賀さん
写真右：とりまとめ役の小倉さん

「絵手紙は、ふれあいカフェの講習会として実施したことがあり、カフェの利用者には馴染みのあるものでした」と話すのは、「ふれあい会」会長であり民生委員の古賀さん。

絵手紙は、常連のカフェ利用者と見守り対象者の高齢者の30軒ほどに配っている。絵手紙づくりに一役買ったのは、「ふれあい会」運営メンバーで絵手紙講師でもある平石さん。絵が得意な他の運営メンバーも手伝い、一枚一枚ていねいに作っている。「季節を感じる手書きの絵と言葉が、受け取るみなさんに元気を運んでいるような気がしています」と、手書きだからこそ送り手に思いが伝わる絵手紙の魅力を平石さんは話す。

また、「ふれあい会」のとりまとめをしている小倉さんは、「一方通行にならないように、絵手紙を受け取った利用者からできるだけ返事がくるような工夫をしています。身体の不自由な高齢者に送る絵手紙は身体を気遣う言葉を入れ、個々に対応

した絵手紙づくりを心掛けています。この活動は6月からスタートし、毎月一度送る「絵手紙」の取組で、さらに住民のつながりが深まっている感じがしています」と笑顔で語る。

■ 一人ひとりの困りごとに近づく活動を目指す！

「ふれあい会」の活動は、ふれあい活動員の選出から始まり、さらに近くでの見守りが期待できる「ふれあいカフェ」の開催や、住民同士の交流促進のための同好会を発足させ、段階的に、一人ひとりの困りごとに近づく活動を進めてきている。

絵手紙を受け取った住民からは「カフェに参加したことがなかったが、再開したら行きたい」「気にかけてくれていることが嬉しい」などの反響があり、これまで以上に支援している高齢者の生活の様子がわかり、今後の活動に生かせそうだ。

コロナにより一時は活動を休止したが、こんな時だからこそ、自分たちにできる活動として、会わなくても相手とつながることができる絵手紙をきっかけに、個々の困りごとに気付き、支援する住民同士のつながりがさらに強くなっていくのだろう。



▶スカイハイツトーカイの外観

(*)【ふれあいカフェ】
開催日時：原則各月10日（土日以外）
14時～16時
参加費：100円
会場：スカイハイツトーカイ集会室